

VI 戒

1 海のいたずら

秋になると冷気が海面を冷やし、浅いところの海水と深いところの海水が循環して海中の透明度は格段によくなる。温度層も消え水面から深層まで水温が一定してダイビングには絶好の季節になる。南洋の魚たちも黒潮に乗ってきている。

「いいところへ連れてやる」宿の親父がいった。伊豆半島波勝崎の沖に、沖根と呼ぶ隠れ根がある。遙か底より塔のようにそそり立っているという。

十月ある日。波勝の海は朝の陽に群青に染まり、岸に沿って流れる潮をともしている。水深七メートルの尖った頂きへ潮に押されて潜る。突然、岩が縦横にまわった。渦に巻かれたようだった。めまいがして吐き気もした。鼓膜が破れたのだ。だけど、事態はものの数秒でおさまった。わけは簡単、鼓膜が破れて耳に入った水は急激に三半規管の温度を下げる。このとき平衡感覚を失うのだ。耳に入った水が体温と同じに温められれば感覚は元に戻る。

船に上がり鼻をつまんで息張ると、耳の奥でぶくぶくと空気が抜ける音がした。不思議なこともあるもの

だ。耳抜きが不調ならば強烈な痛みでそこから先には潜れないはずなのだが、何の前触れもなく鼓膜に穴があいた。どうしてだろう。

海神のいたずらと、後の不摂生と不養生のせいでも耳炎になった。最高の季節を逃してしまった。駆け出しならぬ潜り出しの遠くなった日の出来事。

2 妖海

昭和四十六年初冬。伊豆半島のある海岸にウエットスーツ姿の男性の死体が打ち上げられた。地元の人が見つけて男性ふたりの遭難が発覚した。ひとりとは行方不明になっていた。遭難したのはふたりともぼくが勤めているダイビングクラブの会員で、打ち上げられていたのは最近ダイビングを始めたばかりのS、行方不明はベテランダイバーのKだと、たまたま報道で知った会員が電話してきた。ふたりが海へ出かけたことは誰も知らなかった。

夕方おそく現地に向かった。夜十時過ぎSの知人宅へ着いたのだがSの遺体は検死後家族が引き取り帰った後だった。行きがけに伊東を過ぎたあたりで、やたらスピードをだした車とすれちがった。普段Sが使う赤い外車だった。もしかしてSを乗せていたのかも

知れない。

Kの家族が泊る宿の食堂には明日の搜索の打ち合わせが終わった後、家族と地元の一、三人がいるだけでシンとしていた。だがその空気には、心配する身内の姿、高揚した漁師の怒号や笑い声、警察官の冷静な顔、事故や遭難現場にある典型的な空気が残っていた。ふたりが計画した海行きだったから迷惑を掛けられないと、Kの家族の遠慮もあったが、翌日からの搜索を手伝うことにした。

遭難の経緯は誰もまったくわからない。

Kの搜索は朝早くから始まった。船上から水中を搜索する第一班と、海上から海岸を搜索する第二班のふた手に分かれての搜索である。沈んでいるか海岸に漂着しているか、どちらにせよ「絶対に自分が発見し連れ戻してやる」と山の遭難のときと同じ気持でウエットスーツを着込み潜水準備をして後発第二班の船に乗った。

しばらくして、第一班の漁師が箱メガネで沈んでいるKを見つけたと連絡が入った。広く湾曲した海岸線のほぼ真ん中、浜の沖合約七十メートル、水深約六メートルの砂地に岩が点在する平坦な海底で発見された。急ぎ現場にまわったが、こういう事故に過敏で災

いを恐れる漁師は一刻でも早く終わらせかけたのだろう、釣棒を使って収容した。ぼくは水中に沈んでいたKの姿を確認することができなかった。Kの遺体と対面した。顔は透きとおるような青白さで苦悶した気配はなく外傷もなかった。検死後Kは家族とともに東京へ帰った。

この遭難は実に不可解だ。初冬でも伊豆の海水温は二十度以上あり、透明度もよくダイビングには好条件になる。きくところによると「事故当日は小春日和で海は穏やかだった。前夜、海岸近くのSの知人宅に泊まり、朝は十時頃までゆっくりしてから海へ出かけた」とのことであった。SとKは余裕を持った行動をしていたことは確かで、海況もふたりの体調も申し分なかっただろう。

この種の死亡はおおむね溺死とされる。溺死は最終結果で、そこに至る経緯は当事者しか分からない。だが当事者は語らない。そこで他者は原因と過程をいろいろ推測するのだが、「ウエットスーツを着用した素潜りで、ふたりが同時に死んでしまうようなことがあるのか？」で、ないといいきれないが確率は極めて低い。だが「ひとりは浜に打ち上げられ一人は沈んでいた」これをどう解釈すればいいのか。

Kは、魚突きが得意でベテランといわれる。その日

も水中銃を持って海に入った。水中銃もいっしょに引き上げられたのだから間違いない。Sは入会したてでウエットスーツを買い揃えたところだった。

Kの友人によると、SとKは意気投合したらしく、いつかいっしょに海に行こうと話していたという。Sの知人宅へ泊まったことから、この海行きはSがKを誘ったのだろう。このことから、SはKから素潜りを習うことにした海行きだったと考えられる。

いくらKが魚を追っていたとしても、Sを長い時間ひとりしておくとは思えない。たとえ海面で離れてしまっても浜まで百メートル足らず、Sが泳ぎ着くにもそれほど無理な距離ではない。仮にSが先にトラブルに遭ったとしても、Kの実力ならSを連れて難なく岸まで帰ることができる距離でもある。

この遭難は、「まずKが死にいたるまでのトラブルを起こし、それが引き金になってSがパニックに陥り溺れてしまった、とするのが妥当だ」という見方が多かった。

しかし、「Kが海底に沈んだままになるトラブルとは……」これが最大の謎だった。ウエットスーツを着れば人は浮き、潜ることは難しい。その理由は、ウエットスーツ素材のゴムにはそれぞれが独立した細かい気泡が封じ込められている。だからウエットスーツを着れば浮き輪を持っているのと同じで海面に浮く。

その浮力を相殺するためウエートを腹に巻くのだが、その量はあくまでも水面に浮いていられる量だけで、沈んでしまうほどには付けられない。スキューバなら海底で安定した姿勢を保持する必要性があつて、まれに多目につけることがあるが、素潜りでは絶対ありえない。

【推理と見解】

■ Sに何かあつて、Sのウエートを外し持ったまま沈んでしまったのか。

□ 持ちきれなかったらSのウエートを捨てればよい。さらに自分のウエートも捨てれば沈むことはない。そのためウエートベルトは簡単に外せるバックルが付いている。これはダイビングの「いろはのイ」で、Kがこの動作を怠ることはまずない。

■ Kは水中銃で突いた魚に引き込まれた。人ひとり海底に引き込み置き去りにする魚とは、いったいどんな魚なのか、そんな生き物が海にいるのか。

□ いるわけがない。水中銃はKがいっしょに引き上げられた。

■ Kは突然死にいたる傷病をもっていたのか。

□ 解剖はなく検死の結果は溺死。だから確証もないが、休みとなれば水中銃を持って海に出かけるほどのKの日常から、それはまったく考えられない。

■ 素潜りのベテランに忍び寄るシャローウオーターブラックアウトなのか。

□ Kの場合これが最有力の原因となるが、シャローウオーターブラックアウトについてよく話していたし、まして未熟なSを連れているKが、無理な息こらえなどやるはずがない。

■ もうひとつ、船にあてられたのではないか。

□ Kは無傷だった。傷痕でもあれば当然警察の捜査があるはずだ。でも、それはなかった。

推理は堂々めぐりで、行き着く先は「ウエットスーツを着用したダイバーが、どうして沈んでいたのか」で、誰もが納得する答はだせなかった。歳月が流れこの事故を語る者もいなくなつた。自然界には説明できないことがたくさんある。この遭難からだいぶ経つた日の深夜、伊豆船原岬のうっそうとした杉林のなかをひとりで車を走らせていた。気のせいかなとなしに、湿った冷気が車中に漂い、ゾクッと鳥肌も立った。む

かし西丹沢玄倉川でキャンプをしてたときに、対岸の河原の空中に浮いて燃える青白い火、あれは鬼火だったのだろうか、思ひだしていた。だんだん薄気味悪くなって、もうルームミラーを見ることができなくなり、ひたすらハンドルにしがみついているだけだった。

妖気？

あつ、あのととき、KとSは……。

思いあたつた！

妖怪……、妖海！

3 油断

夜中にフツと目を覚ます。何年たつても突然襲ってくる恐怖の時間。時には大声をあげてしまうくらいの経験。東京湾品川沖の海底トンネル沈埋工事現場のこと。

ひと潜り終えて水面に出る。「案内ロープを外してきてくれ」と、持ち場の違う作業員に頼まれた。気軽に引き受けたのが間違いだつた。タンクの残圧は五十気圧、水深は二十五メートルそこそこ。ロープを解いてくるだけなら充分だつた。海中の工事現場は、黒褐色に水は変色し、水深十五メートルを過ぎれば暗闇同

然だった。いましがたまで、ちよつと離れた同じようなところに潜っていたので大丈夫、と思つたことも災いした。これが油断。

ロープの端は、鉄骨やら廃材らしきものが入り組んだ奥の天井にあつた。手さぐりで外した。戻ろうと身体を返したが、返せなかつた。引つかかつた、出られなくなつた。

このときの状況と精神状態は、次のようなものだった。

——驚怖と焦躁、混乱と動悸。

残圧計の夜光文字盤は緑青色の不気味な光となり、見るたびに針は刻々と残圧を減らしている。タンクと鉄材がぶつかり合う鈍い響きは、冥土の梵鐘か。

——眩暈と悪寒、絶望の慟哭。

手を後ろに回しても届かない。タンクを脱ぎ捨てたとしても、ジャングルジムのようなところから脱出できるとは限らない。出られたとしても深すぎる。浮上途中で窒息してしまう。非情の時は真綿で首を絞めるようにジワジワ迫る。

このままでは死は決定的にある。それも数分後に確実に来る。その瞬間は苦悶なのか安楽なのか。思考は

ますます錯綜し迷走する。

——天恵と幸運。

残圧計の針はもう〇を指している。腕を突つ張つて身体を押し下げてみた。すると身体は急に軽くなつた。あつけなく拘束が解けたのだ。早く気がつけば、何ということもなかつた。暗闇の中、苛立ちと悲愴にアワアワと震える。決して離さなかつたロープを手繰つて自由水域に出た。もうタンクはほとんど空だ。頬をすぼめるだけすぼめてレギュレーターを吸引して、夢中で上へ！上へ！

なみだ眼に黄土色の水面がボーツと見えた。一心不乱に水を蹴る。朦朧として水面から飛び出した。

——茫然自失。

放心したまま浮いていると、自分の排気泡が事もなくかつたように水面ではじけていた。

4 漂流

一九八六年八月、パラオでの出来事。

ぼく……「きのうまでの船長さん、今日どうしたの？」

ガイド：「ちよつと用事があつて、きょうはお休み」

ガイドは、ひとりの青年を連れていた。南国の人の歳を当てるのはむずかしい。茶褐色の肌で、僕より背が低い小太りの青年は、照れた笑顔でちよこんとおじぎをした。二十四、五才だろう。

U嬢……「先生、大丈夫？ 彼」

彼女も同じことを思っていた。

青年は、腫れぼったい瞼の奥にある目を左右に揺らし落ちつかない。分厚く赤黒い唇から出る声は、風貌に似合わずか細い。心持ち自信なさげだ。

ぼく……「ガイドが連れてきたのだから、大丈夫じゃないの」

不安げなU嬢を促してボートに乗る。

マシユルームを立てたような、緑の綿帽子を被った島が点々とする大環礁をボートは疾走する。南国の熱気は爽快な風に変わり、仲間は思い思い海の鮮やかな色変化に見とれ、南の空と海の感触を肌いっぱい楽しんでる。一方、青年は波が純白に砕ける彼方のリーフに向かつて一心に操舵桿を握っている。さつき感じたひ弱な印象はなく、むしろ頼もしかった。

隆起した珊瑚礁は、うねりを磯波に変えて島に運んでいる。スパッと切ったような珊瑚礁の断崖は紺青の海中に落としていく。絶壁に沿って舞降る雪のように、小魚の群れがいつ果てるともなく沈んでゆく。礁壁はサンゴが華々しく、色鮮やかな魚たちが群れる。まともに潮流を受けるせいかソフトコーラルはそれほど大きくなく、魚たちは流れに向き尾ヒレを休むことなく微動させている。陽光は深くまで届き、回遊魚の銀鱗を閃光のごとく反射させる。眼下に鮫が泰然として現れる。

ダイバーは浮力を保つだけいい。潮流がガイドしてくれる。勞せず海に野生が息づく大パノラマを堪能できる。なんの気兼ねもない、時間が来たら水面に出ればいい、そこにボートがいる。世界屈指のダイ

ビングスポットに遊んだ。

そして浮上、水面に出る。……?……、いるはずのボートがない。どうやら青年はぼくらの泡を見失ったらしい。潜る前の晴天はなく、空は厚い雨雲に被われはじめ風もでていた。波間に上下するボートが遠くに小さい。笛吹けど音は飛沫に消されて届かない。ガイドは水中銃を懸命に振るがボートは一向に気付かない。あきらかに荒天に向かっている。風でだんだんリーフから離れる。

まずいつ！内心思っけていても「そのうち気が付くよ。少し島に向かつて泳ごうか」と平静を装い仲間に声をかける。

ガイドを単身ボートに向かわせる。果たして岸やボートに着けるかどうか。足下に鮫がいると思うと、くすぐったいような、しびれるような、変な感覚をおぼえる。仲間は泳ぎが達者な者ばかりなので、何となく島に近づいているようだが、それは気のせいだ。とうにガイドもボートも見えない。

スコール。あたりはさらに暗くなり、波も一段と大きくなってきた。もう三十分ほど漂流している。

エンジン音に気付いたとき、ボートは傍らにいた。それほど海は時化していた。ボートへ上がるやいなや「ふざけるな!」、怒鳴り青年を睨みつけた。彼は泡

を見失ったことを恥じたのか、それとも怒号に驚いたのか、顔を引きつらせて操舵桿に固まった。

ボートが走り出して数分も経たないうちに、暗雲は大粒の雨を落としてきた。つぶてが肌を打つとはこんな感じなのだろう。怒涛は船底を押し上げ海面に叩きつける。タンクは船床で暴れ転がり、仲間は舷によくやくしがみついている。

あと少しボートが遅かったら……。その思いに鳥肌が立ち、沛然たる豪雨にひたすら身を縮ませているだけだ。あの優美な観賞の記憶が早くも遠のいていく。

5 三途の渡し

北極でのこと。恥ずべきことである。

死ぬ！幸い命綱で引き上げられ助かったときのこと。ぼくのなかにずつと引つかかる現象があった。果たしてあれは臨死だったのか？

幸い生きていたのであの時の現象を自分なりに検証してみることにした。

レギュレーターからのエアがだんだん渋くなる。ヤバイ！懸命にフィンを振っているけど向かい潮でままならない。氷上への出口はただひとつ、海水と氷が混ざったシャーベット状の液体が詰まった井戸の

ようなところ。そこに入った途端メインタンクのエアーが切れた。BCにもドライスーツにもエアーは送れず強制浮上もできない。ポニーボトルのレギュレーターに交換する。水中でレギュレーターを交換したときは、息を吐きだすか、レギュレーターのパージボタンを押すかのどちらかでレギュレーター内部の水を抜いてから呼吸する。手順通りにやったのだがレギュレーターの中にシャーベットが残っていた。それを吸つたものだから、気管に海水混じりの氷がもろに入り噎せこみ、喉が詰まり、呼吸不能となった。

激烈な苦しさは一瞬だった。後は穏やかな気分이었다。死の恐怖、生への執着といった感情も、運を天にまかすという期待感もなく、ただただ平静だった。……ああ、エアー切れで死んだ人は、こんな風だったのか。

……思ったより楽じゃないか。
こんなことがよぎっていた。小さな光がちらほらする闇の空間に、スキューバ姿の自分が映っていた。

濃い靄の乳白色のなかにいた。笠を被り菰で覆った男が左側に三つ、右側に二つ並んでうずくまっていた。時代ものの漫画に出てくる刺客か忍者を連想させる姿で、目は笠と菰の隙間からこつちを窺い見ている。

「行こか」声がした。五人が立った。体外離脱の兆候なのか、つられて身体がすうーと軽くなった。雲の中のような漠然とした乳白色の中で暖かさを感じていた。多幸感のある温かさが全身に広がっていた。その間に五人消えていた。靄に包まれていた。しばらくすると、霧の中に誰かの顔が現れて消えた。また現れてきた。今度はゆつくりフェードインしてきた。見覚えのある顔がいつぱいに広がった。音声担当のY君の顔だった。

気が付くと下半身が濡れていた。失禁していた。多幸感のある温かさはこれだった。意識が回復したときは助かったという実感はなかった。

Y君によると、引き上げられたぼくは死人そのものだったらしく、瞳孔にわずかな反応があったという。急ぎ診療所まで連れていかれた。診療所では簡単な問診に、パルスオキシメーターで動脈血酸素飽和濃度を測定された。ヘモグロビンに酸素がどのくらい結合しているかを測る機器だそうだ。正常値は九十五・六パーセントだが、測定値はかなり低く危険な状態だったといわれた。

単なる気絶だったのか？自問してみる。氷上にいた仲間の話によれば、引き上げてから意識が戻るまでの時間はそれほど長くはなかったという。

心肺停止になっても、素早く人口呼吸や心臓マッサージ

ージ（CPR）を施せば蘇生することがある。呼吸停止から二分でそれらの処置がされれば九十八パーセント、四分なら五十パーセントの確立で蘇生する。四分を過ぎると加速度的に蘇生率は低くなる。蘇生術は四分までが勝負どころだといわれる。しかし、ぼくは蘇生術を施される前に意識が回復した。だから単なる気絶といえるが、靄の中の情景と失禁したことで、にわかには死へ向かっていたのではないかと思いはじめていた。

よく聞くことだが人は臨終の際、失禁するという。これは、呼吸停止↓心臓停止↓血流による酸素補給停止↓脳細胞の運動指令停止↓括約筋の間欠性動作停止↓中空性気管（尿道他）の弛緩↓失禁という経過をたどって起こるのだそう。失禁したとなると、「君は、死んだあるいは死へ向かっていた」と知人の医師が言った。だが瞳孔はわずかに反応していた。呼吸も脈拍もなく、瞳孔反射があることを仮死というのだ。また呼吸停止から約四分後から五分の間を仮死状態といい、脳細胞損傷が起き始める時期だ。ぼくは持ち時間ぎりぎりで助かったのだ。あと一、二分も経てば、ほぼ絶望の領域に入っていたのに違いない。パルスオキシメーターの値は、息を吹き返してから約一時間半後の測定値で、直後ではもつと低かっただろう。

もう少し時間が経っていけば本当に危なかったのだ。知人の医師は、「蘇生術も受けなくてどうして息を吹き返したのかわからない。幸運の二文字、ただこれだけだ」ともいった。やっぱり、ほんの入り口だったかもしれないが、臨死だったのだろう。

助かったからいえることだが、自分では意識が戻るまで長い時間かかったような気がする。激烈な苦しさを過ぎると苦悶もなくなる。これは死の苦痛を和らげるためにエンドルフィンというホルモンが分泌されるからだという。生から死への道程、本当に無我の境地にいられる。何の感傷も欲求もない。だから人は死んでいけるのだ。ぼくはこの稀有な状況を体験した。

ここはどういっても嘘っぽくなるが、最後の瞬間はパタリとシャツターが閉じた、としかいいようがない。そして靄の中にいた。靄の中で見た五人は冥土への案内人なのか。そのまま付いて行ったなら本当に三途の川を渡ったのだから。いま思えば、もうちよつと先を見ておきたかったが、そんなこと本気でいったら罰があたる。このさき同じことがあったら、それこそ本当に連れて行かれてしまう。靄の中の出来事や情景は忘れようにも忘れられない。先は極楽か地獄か、あの乳白色のどんよりとした靄の中を行くのはまだ早い。

6 当たり前のことだった

一瞬、水の中にいることを忘れさせる澄んだ水。陽光は微風に乗る小波に、透過と反射を繰り返して、浅い海底に光と影の文様を描く。群れる小魚の隙間から眼下の藍色の深淵を望む。潮流もなく穏やかな海中の美風景。何の気がねのない安心のダイビング。こんな印象は時とともに固定的な記憶から溶解し全身の細胞に広がったのか、いつでも漠とした夢物語に誘われる。

それに引き換え失敗したダイビング、窮地に陥った潜水の記憶は、どす黒い染みのように身体のだこかに貼りついていて拡散しない。しかもその染みは突然アミーバの如く肥大し、最後の一撃とばかり暴れだす。その瞬間、恐怖におののき身は震える。こんな事態がわが身を襲い後悔と恥辱の闇に落ちる。

失敗は成功の元という。一応失敗を考察し次に備えているつもりなのだが、ぼくの場合「喉元過ぎれば熱さ忘れる」のほうだ。幸いスクールの受講生や卒業生の遭難や事故は聞いてないが、歳をとって少しは直ったけれどオツチョコイ僻がある自分は、ひとりのダイバーとしてのときはいろいろあった。東京湾や北極での出来事、潜水の目的は果たしたけれど、後にな

って、ああすればもっと良かったのではないか、と悔やまれることが少なからずある。人生失敗の連続ともいうが、こと潜水は水中での事だから失敗は命にかかわる。なにしろ空気のない世界だから生死の勝負は速い。

こんな訳で自分の過去を反省しつつダイビングの安全を再考してみた。

安全潜水の範囲を〈y〉

気質とかダイビングに向ける心の持ちようなどを〈a〉

体力、体調などその時の身体的条件の集合体を〈x〉

潜水に関する知識（物理、生理、器材、海の知識など）を〈b〉

潜水の技術を〈c〉 とすると、

安全潜水の範囲〈y〉は次のように表せる。

$$y = ax + (b+c)$$

なお、bとcは単独の条件でなく一体となった総合的技量なので括弧でくくった。これにより安全潜水の範囲を広げるには、それぞれのファクターに留意し高めていくことが必要なことといえる。つまりyは、心・

技・体の総和、といつてもいい。

こうしてみるともつと明確になった。だが実に当たり前のことで、これをもつとしつかり留め置けば、”喉元過ぎれば熱さ忘れる”を解消できるはずだ。ずいぶんと手間暇かかる自分に手を焼いている。